ソフトウェア×
ビジネスの視点で研究！

ソフトウェア委員会　委員長
増田　拓弥 氏
（所属：富士フイルムビジネスイノベーション株式会社）

interview

自己紹介

2024.10現在、会社員10年目、JIPA 5 年目、委員長 2 年目になります！JIPAではこれまでソフトウェア委員会一筋で活動してきました。趣味として筋トレ/野球/ウインドサーフィンなどをしていましたが、30過ぎて体力の重要性を感じたことやもっと色んなスポーツをやってみたい！という思いから、最近はテニス／ゴルフをはじめました。

Q　研究テーマとそれらを選んだ背景・理由は？

今年度のソフトウェア委員会の研究テーマは下記の通りです。

第 1 小委員会：最新のソフトウェア関連技術の“特許価値”
第 2 小委員会：“改訂CGC”をふまえたソフトウェアに関する知財権の社内外へのアピール施策
第 3 小委員会：ソフトウェアに関する最新の“判例・審査・出願・制度”に関する調査研究
第 4 小委員会：生成AI技術やDX技術、仮想空間技術における“知財ミックス”の在り方

ソフトウェア委員会では、基本的に①各委員の方が興味のある事柄②ソフトウェア特有の知財課題がある事柄から、研究テーマを選定しています。

第 1 、第 2 、第 4 小委員会それぞれの研究テーマ名にある、**“特許価値”、“改訂CGC”、“知財ミックス”といったキーワード**は、昨今の知財関係者の方にとって非常に関心が高いものとなっており、これらは、**権利侵害立証の難しさ／内部設計と外部設計いずれのどの部分を権利化対象とするか／クレーム主体はどうするか**、といったソフトウェア技術ならでの知財課題に関係するテーマであると考えています。

加えて、第 3 小委員会の研究テーマとなっているとおり、**越境問題に代表されるような最新の判例等**を熟知しておくことも知財実務者にとって重要であると捉えており、判例や審査制度に関する研究は、毎年行うようにしています。

上記の事柄に対する解決策の提示や事例紹介などを行うことで、ソフトウェアを取り扱う知財関係者の方にとって実務において役に立つ提言となるよう努めています。

Q　委員会の特長／魅力は？

“ビジネスの視点を取り入れていること”

一言でいえば、これがソフトウェア委員会の特徴だと思います。余談ですが、一部の方から“ビジネス〇〇委員会”という名前に改名するのはどうかという話が上がったくらいです（笑）。

まず前提として、上記でも触れた通りソフトウェア技術は権利侵害立証の難しさが問題として挙がることが多いです。仮に技術として大変優れた革新的なものであっても知財目線では活用しづらいソフトウェア技術がある一方、革新的な技術という部類ではないですが知財目線では活用しやすいソフトウェア技術もあります。そういった側面から、ミクロで分析し権利だけにフォーカスしていても何故そのような権利の獲得を狙いにいったのかの解明が難しいため、研究を行うにあたって、権利者となっている**会社のビジネスにも注目し、「どのような事業を行っている会社が、どういった権利を獲得しにいっているのか」をセットで検討**するようにしています。この点が、“ビジネスの視点”と表現している所以であり、ソフトウェア委員会の特徴かつ魅力的な点かと思います。

そして組織の体制／活動に、多様性があることもソフトウェア委員会の魅力です。**24年度は計27名の委員によって構成**されており、各委員が担当している事業や商品も、**通信機器／家電／印刷機／自動車／建設機器／スポーツ用品etc**と多岐に渡っています。また、24年度から事業会社のみならず法律事務所所属の知財関係者の方も加わり、より多様なバックグラウンドを持つ組織となりました。活動においても、昨年度（23年度）はDX工場の見学に伺ったり、24年度は**複数の法律事務所様（国内や欧州の法律事務所様など）と越境問題や査証制度に関する意見交換を何度か行ったりと、JIPAの組織力を活用**しながら、より有用な研究活動／提言につなげるべく色々な知見を蓄積するようにしています。

※ある意見交換会の様子

Q　委員会としてのこだわりは？

“楽しくも実りあるものにする”というのがこだわりであり私の裏テーマです（笑）。JIPAの活動は他社の知財関係者の方と交友が深まり楽しい側面がある一方、毎月会合があったり宿題事項があったりと日々多忙な委員の皆様の貴重なお時間を頂いていることも事実です。そういった貴重なお時間を無駄にしないためにも、活動を楽しみつつ実務において役に立つ研究を、論説という形できちっと成果としてまとめることにしています。

自分自身、研究や論説のまとめをおこなっていたときは大変さを感じることもありましたが、**当時から現在に至るまでJIPAで**

しか経験できなかったことが多々あり、それらが自分の成長に繋がったと常々感じています。そういった経験からも、**楽しいことに偏ることなく、楽しいことと、成果を求めることをバランスよく活動できる専門委員会**でありたいと思っています。そして周りの方々の理解とサポートがあって活動させていただけていることに感謝しつつ、少しでも知財業界への貢献が果たせる専門委員会であるよう努めていきます。